Osaka University Knowledge Archive

Title	山岳登拝のソーシャル・キャピタル : 出羽三山の登拝行事を例に
Author(s)	長澤, 壮平
Citation	宗教と社会貢献. 2012, 2(1), p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/19609
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論文

山岳登拝のソーシャル・キャピタル

―出羽三山の登拝行事を例に―

長澤壮平*

The Social Capital from Mountain Pilgrimage

The Example of the Pilgrims of Dewa-Sanzan

NAGASAWA Sohei

論文要旨

本論文では、伝統的な山岳登拝の行事においてソーシャル・キャピタルがどのように生成し、またそれがいかなる効果をもたらすかについて考察する。

出羽三山の登拝行事では、「感謝」を基調とする登拝の協働や接待などにより登拝集団の SC が生成される。この SC は講の人々の日常における結びつきへと展開するとともに、世代を超えた持続性を持つ。こうした特徴は福利・倫理的な意義を持っているが、その内的凝集性が一方で外部との関係性や将来への柔軟な展開への道筋を閉ざしてしまってもいる。

キーワード　ソーシャル・キャピタル、山岳登拝、出羽三山

In this paper, I consider the creation of social capital in the tradition of mountain pilgrimage, as well as the various effects of that capital for well-being.

In pilgrimage to Dewa-Sanzan, social capital among the pilgrims is created through cooperation and acceptance of climbing worship based on “gratitude.” This social capital develops bonds among believers in their everyday lives, which are also sustained across generations. Although this social capital has significance for individual well-being and ethics among the pilgrims, the resulting inner cohesiveness limits relations with outsiders and constrains the flexibility needed for future development.

Keywords: social capital, mountain pilgrimage, Dewa-Sanzan.

* 中京大学・非常勤講師　nagasawa@w9.dion.ne.jp

1. はじめに

近現代を特徴づけている人間の疎外、物象化、利己性の増大は、社会学草創期以来の根本問題であるにも関わらず、今日に至り、新自由主義の浸透のなかで、その傾向にますます拍車がかかるばかりである。日本では自殺者が 12 年連続で年間 3 万人を超え、同じく 3 万人を超える遺骨の引取り手もない「無縁」の死者は今後さらに増加していくと見られている。ほかならぬ「死」に関わるこうした状況こそが、その根本問題の深さをありありと示しているように思われる。

このような社会性の危機のなかで、伝統的宗教文化を人々の福利向上に生かす取り組みが報告されている［広井　2005, 2008：竹元　2008：藤本 2009：板井　2011］。これらの報告は、社会の福利に「貢献」する資源として、伝統的宗教文化に光を当てるものといえよう。「貢献」はあらゆる資源の基本的作用といえるが、稲場圭信はいわば「宗教的なもの」を資源と捉え、その動態に焦点を当て「宗教の社会貢献」と概念化し、以下のように定義している。

> 宗教者、宗教団体、あるいは宗教と関連する文化や思想などが、社会のさまざまな領域における問題の解決に寄与したり、人々の生活の質の維持・向上に寄与したりすること［稲場・櫻井編　2009］

本稿では、この定義に含まれている伝統的宗教文化の「貢献」を課題とし、これを探究したい。上に掲げた報告は、いずれも伝統的宗教文化を資源とする新しい取り組みの成功事例に関するものだが、本稿ではあえて伝統的宗教文化における伝統的な側面のなかに息づく共同性に目を向ける。そのために「ソーシャル・キャピタル social capital」（以下 SC と略す）の枠組みを用いて、伝統的宗教文化における共同性の現在的意義を明らかにしたい。

ソーシャル・キャピタルとは、人間相互の関係そのものがもつ資本性を表す概念であり、それがどのように社会の効率を高めるかを明らかにすべく、現在盛んに用いられている。

SC の代表的な論者である政治学者のＲ・パットナムは、SC を以下のように定義している。

> 協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼、規範、ネットワークのような社会的組織の特徴 ［Putnam, et al. 1993: 167］

SC の概念はゆるやかであることから、論者によってさまざまな用いられ方をしているが、ここでパットナムが挙げている「信頼」の概念は、多くの論者に共通する SC の基本的特徴といってよいだろう（［宮森・大守編 2004］を参照のこと）。信頼は、愛情などの絆や、約束を果たす義務や、相手への誠意などから醸成され、人間を相互に結びつけるものであり、この SC の力によって政治的統治や経済活動が効率化される。しかし、それは効率のみでなく一方で福利をもたらすことにも大きな意義がある。

SC 概念を用いる上で注意すべきは、この概念が単なる特徴づけのカテゴリーではない、ということである。すなわち、SC はいわば「絆」に焦点を当てるものだが、その対象を「豊かな資本」のイメージとともにスタティックに特徴づけるためのラベルではない。このような用い方では、ありとあらゆる社会関係が SC に当てはまり、いかにも安直な議論の域を出ない。そうではなく、SC 概念は、「絆」を「資源」として括っておくことによって、それがどのように生成されるか、どのように配分されるか、そして、どのような効果を持つかなどを明らかにすることで、予測可能性を得るためにある。さらに「橋渡し型」「結束型」などとして、SC に関連する構造的ないしネットワーク論的特徴が分析される。以上からわかるように、SC 概念は、たんなる対象の特徴づけに用いるためのものではない。

以上から、本稿の目的はつぎのとおりである。すなわち、SC の枠組みを用いて、伝統的宗教文化が、どのようにして人と人とのつながりをつくりだし、その絆を深めているのか、そしてどのようにして福利を向上させているのかを明らかにすることである。

本稿で取り上げる事例は山形県鶴岡市にある羽黒修験の宿坊と一般信者の講とのあいだで行なわれる山岳登拝行事である(1)。登拝行事のありようは近代において大きく変容し、おおむね衰退傾向にあるが、基本的には前近代から引き継がれてきたものであり、伝統文化としての性格を強く持っ

ている。しかしそうでありながら、それは共同性を新たに生成したり、再活性化したりしつづけるような現在的意義がある。さらに登拝行事は「山」という空間的特徴と「登拝」という身体的行為が人々のつながりに関わっているという点でも重要な事例と考えられる。

2. 羽黒修験の歴史的背景

羽黒修験の歴史に関する学術的情報は膨大なので、詳細については先行研究を参照していただき［たとえば戸川編　1975］、ここではごく大まかな概要のみ確認するにとどめたい。

山形県の庄内平野の南東部に羽黒山、月山、湯殿山からなる出羽三山が連なっており、このうち羽黒山の麓に本稿で取り上げる羽黒修験の拠点がある。出羽三山は古代に山岳信仰の道場として開かれて以来、かたちを変えながら現在まで維持されてきた。江戸期の羽黒山内においては肉食妻帯をしない清僧修験の寺院が 30 以上存在し､他方で山門の外の手向(とうげ)地区には、総数 300 を超える妻帯修験の宿坊が存在した。宿坊のおもな役割は、出羽三山に訪れる行者や参拝者の勤行や登拝を導くことにあり、羽黒修験に属する修験者たちが担っていた。しかし、明治 2 年に神仏分離令、さらに 5 年には修験宗廃止が伝達されたことで、山内の清僧修験は廃され、門外の手向の宿坊も 40 軒あまりとなった。これによって約 9 割の修験者が還俗した。

明治 7 年には月山、湯殿山、羽黒山が、羽黒山の出羽三山神社に合祀されるようになる。これ以後、三山神社は廃仏毀釈を強行し、多くの仏像仏具が破却され、手向の宿坊も明治 14 年には三山祝(はふり)として神職となった。戦後、出羽三山神社は神社本庁に属する一方、天台宗に属する修験寺院は神仏分離後も独自の経営を維持し、昭和 20 年、羽黒山修験本宗として自立した。

こうして羽黒修験は現在、一方で出羽三山神社に属しつつ手向地区の宿坊を経営する神道系修験者、他方で宿坊経営は行なっていない天台宗系の羽黒山修験本宗として組織が二分されている。

3. 手向地区と宿坊の概観

宿坊街がある手向地区は鶴岡市羽黒地域、羽黒山の西麓に位置する(2)。手向地区の入り口に大鳥居があるが、この鳥居を境として山側の手向地区と鶴岡側の一般的な地区とを、地元住民は社会的に区別された領域として意識している。その理由として、手向地区は住民がみな出羽三山神社の氏子であり、特有のさまざまな伝統的祭礼を行なっているが、鳥居の外はそうではないこと、そして手向地区は約 30 件 (3)の宿坊街を中心として形成され、行者や参拝者が大勢訪れることが挙げられる。地元住民の多くは商業地域の発展した鶴岡市街地を中心として生活する現代都市文明になじんだ人々であり、多くの人々は本稿でとりあげる参拝に訪れる信者のようには出羽三山を信仰していないのが現状のようである。

各宿坊はそれぞれが檀那場・霞場と呼ばれる特定の地域を受け持っており、各地域では信仰をともにする人々の結社である「講」が組織されている。講組織の分布は東日本に限定され、富山県、長野県、山梨県、埼玉県、東京都以西は含まれていない［岩鼻　2003］。各宿坊は世襲で引き継がれ経営は自立しており、安定的な経営を維持する宿坊もあれば、経営危機にあったり実際に廃業したりする宿坊もある。

宿坊では、先達と呼ばれる修験者が参拝に訪れた講の勤行と登拝を先導するほか、宗教的な儀式だけでなく参拝者のもてなしや宴会も行われる。冬期には先達が受け持ちの地域の講を巡回し、御札を配ったり勤行を行ったりする。宿坊の営みは、こうしたなじみの講とのやりとりを基本としているが、昨今は旅行業者が企画したツアーや、一般観光客を受け入れる宿坊も一部出てきている。

宿坊への来客数は概して減少傾向にある。これは社会構造の変化が影響しているが、講が属する地域社会の衰退がおもな要因とみられる。講の多くが拠って立つ農山漁村地域社会では、産業の衰退、過疎化、あるいは地域の都市化などによって地域共同体が崩れつつある。この事態が、講の衰退や消滅に直接つながっているのである。

もうひとつの理由としては、交通の発達によって近隣の県から出羽三山が近くなったことがある。たとえば山形県や秋田県の人々にとっては、出

羽三山が近所の山になり、宿泊の必要がなくなったことで、そもそも泊まりがけの勤行を旨とする講は減少していった。逆に、若者が新たに参入するなど活気のある講は、地域共同体がある程度維持された遠隔地に見られる。このことは、登拝行事の伝承を支える信仰や伝統などの諸価値、ないしは親密なつながりや行事の非日常性などからなる論理も、社会資本のような環境要因に決定的な影響を受けることを示している。

ところが全宿坊の宿泊客総数を見ると、2005 年度は 15,262 人であったが、翌年の 2006 年度には 19,608 人に増加している。これは一部の宿坊が旅行業者と提携し、ツアー旅行を受け入れるようになったことが影響していると考えられる。観光客を受け入れずに信仰の伝統を守るか、それとも生き残りを観光に託すかは全宿坊共通の問題だが、伝統維持を本意とする宿坊は根強いようである。

4. 講と登拝行事

以下では登拝行事の概要を確認する。

各地域には、念仏を唱える念仏講や、女性のみが集まって安産を祈願する子安講など、さまざまな講が結成されているが、こうした講のひとつとして、出羽三山へ参拝する講がある。登拝目的は、年に一度の行、一人前になるための通過儀礼、一生に一度の参詣などがあり、行事の名称も「奥州まいり」「お山まいり」「お山かけ」「最上まいり」などさまざまであった。講の世話人は修験者や地域の氏子となっており、参拝するメンバーは講の全員の場合と、代表者数名の場合がある。こうした意味づけや組織の基本的なありようは現在まで継承されているが、人数や行程などは以下に述べるように大きく変わってきた。

登拝行事は通常、夏季に行なわれる。現在は 7 月中旬から 8 月中旬までの間で、この時期、手向の宿坊街は大勢の参拝者でにぎわう。道順は、羽黒山から入って月山、湯殿山の順に巡られる。このルートは古来「三関三渡」と呼ばれ、現在、過去、未来を意味する。羽黒山は現在、月山は過去、葉山・薬師岳は未来、そして最終目的地の湯殿山で生まれ変わると言われる。ここで留意しておきたいのは、出羽三山の登拝は単なる参拝というだ

けでなく、生まれ変わりのための修行という意味があるということである。こうした意味づけは現在も変わっていない。

江戸時代後期、たとえば千葉県のある講の場合、出羽三山参りの全行程は約 2 ヶ月を要したが、伊香保、善光寺、松島、筑波山などといった観光名所も組み込まれていた。出発前に地域にある行堂で修験者の先導により勤行が行なわれ、羽黒の宿坊に到着すると精進潔斎や勤行が行なわれた。出羽三山では多くの場合 2 泊 3 日が費やされた。

戦後になると交通が発達し、羽黒山頂や月山の 8 合目まで車道が整備された。これによって出羽三山へ短時間で往復できるようになったほか、登拝のルートも大きく変わった。まず羽黒山頂の出羽三山神社へ車で行って参拝する。ついで月山 8 合目まで車で移動し、そこから 2〜3 時間かけて月山山頂に登り、山頂にある月山神社を参拝する。そして 8 合目まで引き返し、車で湯殿山神社を参拝する。現在はこのコースをとる講が非常に多くなっている。さらには他の観光地との抱き合わせによる効率化をはかるために、本来のコースを崩して湯殿山から参拝するような講もあらわれている。こうした講の参拝行程の変化は、先に述べた講自体の高齢化や存続の危機などを反映しているが、一方で参拝を司る宿坊や先達が講に課す参拝作法の規制が弱いことをあらわしている。とはいえ、講の参拝者たちをまず宿坊が迎え、先達の導きによって精進決済ののち三山登拝を行なうという原則は、多くの宿坊において現在も維持されていると見てよいだろう。

5. 先達の役割・意義

以下では、ここまでに見てきた登拝行事を SC の視点から捉えるため、当事者の語りを中心に検討を進めていきたい。はじめに登拝行事を先導する先達が行事においてどのような役割を担っているか探ってみよう。

先達のひとりK氏は、先達特有の役割として「自然への感謝の気持ちを持って登ってもらう」ということを重視しているという(4)。感謝の気持ちをもって山に向かい合う姿勢をうながすことが、先達の役割と考えられているようだ。これと関連して、他の先達 H 氏は一般的な登山文化のなかで言われるような「山を征服する」という言葉に対して強い口調で批判してい

た。「山を征服するなんて言葉はほんとあり得ないです。どんな山であれ。」(5)ここでは「山への感謝」へと方向づけられた厳粛な態度を見て取ることができる。それは、「征服」や自己実現の手段として西洋からもたらされた近代登山、さらには娯楽としての観光登山という、一般的な登山のあり方から一線を画した、感謝や敬意をともなう登山へと参拝者を導く、先達の役割を表している。

以上、先達の役割として講の人々に山への感謝の姿勢をうながすことが見出された。3 節で述べたような一般社会との区別は、こうしたところに本質として表れているといえよう。これを踏まえながら、つぎに実際の登拝において生じてくる、先達と講との相互行為のありようについて検討してみよう。

6. ソーシャル・キャピタルの生成

6.1 登拝の協働による SC 生成

参拝に訪れた講は、数名から数十名の集団で編成され、先達に従って登拝する。このとき、先達は、神様や山への感謝の姿勢をうながすようにして、講の人々を導いていく。こうした登拝過程のなかでどのような相互行為が生じているのだろうか。

講では、おなじグループのメンバーを「同行（どうぎょう）」と呼ぶ。先達のひとりH氏によれば、同行のメンバーはともに登拝するなかで、多かれ少なかれ親睦を深めていくという。ある講の場合、我先に登ろうとする利己的かつ競争的な人が多くいたという。ところが、助け合いながら登拝をすすめていくうちに、それまで多くいた利己的かつ競争的な人たちがいなくなってきて、つながりが強固になっていったという。

このような登拝の過程では、メンバーが互いに助け合うことを通して、互いの信頼と絆を深めていると考えられる。すなわち登拝の互助過程が、SC を醸成していると考えられるのである。

さらにここで注目すべきは、SC が醸成されるなかで、利己的かつ競争的な関係性が、助け合いという相互扶助の関係性へと逆転されていったこと

である。個々人の距離を拡大する利己性・競争性が、現代日本の福利を低下させる要因とすれば、それを抑制し、相互扶助へと導く登拝過程の現代的意義は明白である。

これに関連する語りをいまひとつ挙げてみたい。

K氏

Q：先達で講の人たちを率いていくときに、印象に残るエピソードはありますか。

K：とにかく、講で 80 から 90 歳近くなる方もいるんですけど、まあ登りたいっていうわけですよ。どう考えてもちょっと無理なんじゃないかな、ってわれわれ思うんだけど、やっぱり講のみなさんはその人が行くっていったら、じゃあわかった！ってことでね、まあいっしょに行くんですけど、とにかくこう、みんなで助け合いながら、登るようにしてますよね。水持ったり、肩かして、全員で交代してね、年配の方を一緒に連れて行って、で、自分たちだけで行動したりはしないですよね。もう、必ずひとつにまとまって、参拝する姿は、すごいなあ！って、いつも感心しますね。厳しいですからね。湯殿山とか[6]。

ここでも「必ずひとつにまとまって」、「みんなで助け合いながら」といわれているように、お互い支えあいながら登っていくなかで、「同行」が形成されていることがわかる。「自分たちだけで行動したりはしない」として、利己性・競争性が抑制されていることも同じである。この場合では、すでに講のグループにおいて形成されている SC が、登拝という目的を達成する上での重要な資源となっていると見ることができる。先達からみれば登頂が難しいと見られる老人さえ、参拝を達成するほどに同行の SC が蓄積されているのである。

先の H 氏の発言に見た例では、登拝過程によって利己性が抑制されつつ SC が生成されている仕方が見られ、次に見た K 氏の例では、登拝困難な人さえも登拝を達成させるという SC の力が見られた。登拝における協働と互助は、SC をつくりだし、またその SC は登拝達成の力を発揮させるものとして考えることができるのである。

6.2 接待による SC 生成

登拝行事や、先達が講の地域を訪ねるさいは、かならず接待の宴会が行われる。これは宿坊と講の人々が酒を酌み交わしながらじっくりと語りあえる大切な機会と考えられている。これに関する発言を見てみたい。

H氏

H：斎戒所とは、遠くから来てくれて山登るまえの精進潔斎の場であり、一夜の御籠り所という場所ですが、やはり来てくれたからには接待しなければいけない。そこで一緒に酒飲んでるなかでいろいろな話をする。ひとりひとりと。それがまずもって一番大切なことだと思うんですよ。ところが、バスで３台来ただの４台来ただのという時代もあったわけです。そんなに人数来たところで、どうやって話をするのかと。それが一番大切な部分なのに。･･･しゃべる時間がないんですよ。たとえば朝の祈祷が終わってから、10 分しゃべる、20 分しゃべるといっても、そんなに簡単なものじゃないと思いますよ。だから、そういうコミュニケーションとること自体が、また私らがその地域に伺った時に顔を覚えてたりコミュニケーションをとれる、ひとつの術なわけです。それが、大勢来たらもう出来なくなります。はっきり言うと。

Q：基本的には接待にしたって、人数多すぎだと、顔も覚えられないってこともある？

H：絶対無理ですね。

Q：逆に小規模で、昔からやってる講であれば人と人のつきあいになるわけですね。

H：やっぱり、つながりというのはそういうものだと思います。私が行けば大接待してくれるわけですしね(7)。

この発言では、「一緒に酒飲んでるなかで」、「ひとりひとりと」、「いろいろな話をする」、そしてそこにある人と人とのつきあいが「一番大切なこと」と述べられている。先達はこのような顔の見える二者間の濃密な対話によって、登拝だけでなく個々人の人生にまで関わっていき、講の人たちとの人間的な深い結びつきを育んでいくと考えられる。このようにし

て先達は同行と人間的に深く結びついていくと考えられる。すなわち接待における濃密な対話は、先達と講のSCを深めていく重要な意義を持っているのである。

7. ソーシャル・キャピタルの展開・持続性

7.1　SCの日常への展開

以下では講の人々の状況に目を転じてみよう。

千葉県八千代市の講 S では、出羽三山への参拝は、一生に一度男性が行うものとなっている。参拝する年齢は決められておらず、適当な時期に参加者を募って行く。T氏が参加したのは16年ほど前で、32名が参加したという(8)。参拝が済むと地区内に「ボンデン塚」と呼ばれる石碑を建て、メンバーの名を刻む。この風習は江戸時代から続くものであり、古いボンデン塚も残っている。さらに参拝を済ませたメンバーのみで毎年「ボンデンハギ」という行事を行う。これは登拝を済ませた人間が死ぬと神になるという信仰にもとづくもので、祭壇を設置して登拝した人々を祀る葬送儀礼である。以上のように「ボンデン塚」や「ボンデンハギ」を通して、「同行」は地域の生活でまとまっていくことになるが、T氏がいうようにメンバー相互の親睦の意味は大きいという。行った後の変化について T 氏は以下のように語った。

> まあ、行ってきましたって、それだけですね。一緒に行った仲間は親睦深まったんですけど。そのメンバーだけ。けっこう海外旅行とか行ったり(9)。

おなじ講メンバーだけで育まれたSCは、のちに海外旅行への同行というかたちに現れた。ここから登拝行事で作り出されたSCが、地域社会におけるSCにもつながっていったと考えることができるだろう。

千葉県市原市における講Kは、信者百数十名から構成されており、八千代市のものと異なり毎年のように登拝行事が行われる。登拝は山に祈りをささげ、おのれを清めるというような意味をもつものである。5〜6 年連続して登拝したので2010年は休止したという。さらには月2回、地域の男性

が「行堂」と呼ばれる建物に朝から集合し、出羽三山への祈りをささげる儀式を行う。集まるメンバーは 20 名前後で、50 代から 80 代の中高年男性からなる。集会は昼過ぎまでおこなわれるが、ここでも食事や酒がふるまわれ、リラックスした懇親の場が作り出される。こうした機会は、地域の SC を維持していくうえで重要な意義を担っていると考えられる。

さらにこの地域では講を中心にして３町が結束しているという。近隣地域では町ごとに関わり合いはほとんどないが、「出羽三山のおかげ」でまとまりがあるというのである。ここでは講を中心に構成される信仰行事の組織が、地域住民の結束をもたらしていると考えられるだろう。

7.2　SC の持続性・歴史的奥行き

以上に見てきた宿坊と講、および講員のあいだでの SC は、世代を超えた持続性をもっている。

出羽三山神社の吉住登志喜（とし き）氏は以下のように述べている。

> （講の人たちは）もう、宿坊にとって、ほとんど家族同然なんです。講中のおじいさんと宿坊の檀那のおじいさんが友達で、その孫同士がいまもお付き合いしているとか、そういう世界です［吉住　2004］。

ここでは宿坊と講のつながりが、世代を超えて連続していることが示されているが、そうしたつながりが「家族同然」とされているところにつながりの深さが確かめられる。

正伝坊の吉住光正氏は、アンケートの回答のなかで以下のように答えてくださった。

> 宿坊と講との繋がりは、歴史的なものに裏づけされた深さがあるので、基本的にひとつの宿坊が失われることは、これまで拠り所を求めて参拝してきた、講の多くの方が、出羽三山での居場所を失うことへもつながります。祖先が歩んできた道を踏みしめて来られる信仰崇拝者にとって、すぐに代わりの坊というわけにはいきません(10)。

この回答では「歴史的なもの」と言い現わされている持続性に裏づけされた「深さ」が強調されている。「すぐに代わりの坊というわけにはいきま

せん」と言われているように、こうしたつながりが容易に代替可能なものではないということは、先の吉住氏の「家族同然」という特徴に符合する。家族は代替が容易ではないからである。宿坊と講との SC は、世代を超えて持続したものであり、そうであるゆえに家族になぞらえられるような代替困難な深さをもつという事が出来るだろう。

このことは、千葉県の講 K の人々の発言からも確認することができた。先祖代々世話になってきた宿坊が後継者不在のため途絶してしまい、別の宿坊が先達を引き継ぐことになった。講の人々は、それまでの先達を「素晴らしい人だった」と評し、深く信頼していただけに、得意先の宿坊を失ったことは、講の人々に混乱を与えた(11)。それほどに長年をかけて育まれた深い信頼関係があったのである。

先述の講 S は、男子の通過儀礼として行われるが、登拝が終わって地域へ帰ってくると、地域内に「ボンデン塚」と呼ばれる同行者の名を刻んだ石碑を建てる。ボンデン塚には江戸期のものもあり、先祖の名前が確認されるものもあるという。それを見て講員は先祖とのつながりを実感するというのである。地域で登拝が企画されると、「そろそろ行くか」という動機で、家族や近隣住民としめし合わせて、メンバーが募られる(12)。多くの場合、親も行った登拝に参加するため、登拝は家族のリアリティをともなっている。そして親への感覚は、先祖の名が刻まれたボンデン塚をとおして、先祖のイメージとも連続していると考えられる。先達の発言に示されていたような世代を超えたつながりは、ボンデン塚を通して、講員のあいだにも存在するのである。

8. 考察　山岳登拝の SC の評価

これまでの検討をまとめてみよう。

まずは登拝行事が登山であるという、身体的な特殊性に注目しておきたい。登山は、山を登っていくという非日常的運動へと、おのれの存在を没入させていく特殊な身体的行為だが、そこでは、より身体能力の劣った人を、身体に余裕のある人が助けるという、助けあいの関係性が生じる。したがって、この「登山の協働」を SC 生成の重要な源泉と考えることができ

る。

さらにこの登拝のなかで山という対象への意識は、先達によって感謝の対象として方向づけられる。たしかに講の人々からも「お山がもっとも大切」という言葉が聞かれた。このことから山への礼拝が、究極の目的として設定されており、先達を含めた登拝の集団は、この目的をもったアソシエーションだということが確認される。おそらくこうした「感謝」を基調とする登拝過程の宗教的な特徴は、先に述べた「登山の協働」における SC にも関わっているだろう。というのも、助け合いは感謝を伴うからである。こうしたアソシエーションは、稲場圭信がいうような日本人が本来もっている「無自覚の宗教性」を喚起するものと考えられる［稲場　2011］。登拝という身体的行為によって、自然や仲間に対する「おかげ様の念」が喚起されるのである。逆にこの「無自覚の宗教性」がなければ、登山は個人的、競争的になるなどして、講のような SC は生成されないかもしれない。

接待によってもたらされる個人同士の対話による相互理解もまた、講の SC の質を測る上で重要な要素と考えられる。先達の発言では、人数が多すぎたり、それによって個人同士が対話できなかったりすることを否定する意識が見られた。また講 K においても代々世話になっている先達の人格に対する個人的信頼が確認された。こうしたことから、個人同士の深い相互理解が講の SC において欠かせない要素であることが分かる。こうした個人同士のつながりは、宿坊と講、および講員同士の個々人のあいだに展開し、登拝集団全体を特徴づけるものでもあるだろう。

以上、「登山の協働」、「礼拝という目的をひとつにした結合」、「個人同士の相互理解」という諸過程によって、講の SC はかたちづくられると考えられたが、これは登拝行事という非日常的なイベントのみならず、講員の日常的なつながりをもつくりだしていることが確認された。講 S では「ボンデンハギ」などの行事や旅行などのレクリエーション、講 K では行堂における礼拝儀式や近隣３町の結束など、それぞれの日常における人々のつながりが、登拝行事をもとにして展開していることが明らかになった。ここに登拝行事がもつ日常生活の福利を促進する一定の効果をみることができる。

先祖とのつながりにみられた持続性は、今回見てきた講の SC がもつ大きな特徴であろう。それは、先達の家族、参拝者の家族、地域社会のつなが

りを含みこんだ SC のネットワークの共時的なひろがりが、リアリティをともないつつ世代を越え、歴史的な奥行きにも展開しているとみることができる。家族の絆が希薄化し、家族と疎遠な老人が増え続ける現代社会において、SC のなかでつねに先祖を組み込み、イメージを喚起させる講のシステムには現代的に大きな意義があるように思われる。

本稿で見てきたような講の SC は、協働と感謝、個人同士の相互理解、日常生活の福利、先祖のリアリティなどの特徴を備えており、それらがあいまって宿坊と講からなる登拝集団のなかに強い内的凝集性を与えているといえよう。人間の福利という観点から見れば、その貢献度は大きい。しかし内的凝集性が強い分だけ、外部との関係性の展開がかなり限定されていることも事実である。地域共同体を単位にしたその集団の親密さは、内集団と外集団のあいだの明確な境界をつくりだし、外部の人間が関わる余地を無くす。このことは各宿坊が、受け持ちの講を占有するという制度にも関わっている。すでに述べたように受け持ちの講は通常地域によって区切られ、まれに宿坊間でやり取りされることがあるが、基本的には各坊が占有している。以上から、今回見てきたような宿坊と講のあいだで生成する SC は、内的凝集性と同時に排他性をもつ、いわゆる「結束型」のものと考えられる。その排他性は、たとえば登拝集団の運営状況が、講の属する地域社会の盛衰や文化意識などの状況にほぼ完全に依存してしまうこと、そして新たな参拝者の参入を困難にするなどして SC の新たな展開を制限することなどにつながってしまう。

本稿で見てきたように、羽黒修験の登拝行事の SC は、過去的な様式でありながらも現代的な諸問題に直結した意義がいくつも見出され、福利・倫理上の貢献が大きいと考えられる。その衰退について考えると、外部との関係性を閉ざす「結束型」の要因が析出されたが、よりマクロな問題として伝統と近代との対比が背景に浮かび上がっている。3 節で述べた鳥居の内と外、すなわち手向地域と一般地域の区別に象徴されるような、自然に沿って生きようとする伝統的領域と、山を「征服」し出羽三山を「近所の山」にせしめた近代的領域との対比において、現代日本社会の大勢は後者で占められている。登拝行事は、こうした非対称な構図のなかで、圧倒する異質なものにさらされ衰退しつつも、一般社会への貢献をなおも持続していると見ることができる。

註

(1) 羽黒山の人々に対する調査は以下の通り。宿坊を経営する 5 名、および行政関係者 2 名に対して、2008 年 3 月、および 2009 年 8 月にインタビューを行った。さらに 2009 年 9 月に宿坊全戸に対し郵送でアンケート調査を行った。
(2) 参拝する側の講の人々に対する調査は以下の通り。千葉県内における講信者 2 名に対して、2009 年 12 月、および 2010 年 9 月にインタビューを行った。さらに 2010 年 9 月に講の儀礼を調査し、そのさい 3 名に対して聞き取りを行った。
(3) 鶴岡市の総人口は 2005 年現在で 142,384 人となっており、羽黒地域の総人口は 9,323 人、このうち手向地区は 10 の集落から構成され人口は 1,692 名、世帯数は 439 件となっている。羽黒地域の第一次産業の割合は 22.7%だが、そのなかの手向地区にかんしては第一次産業の割合が 8.4%と低い一方で第三次産業の割合が 62.8%と高く、うち飲食・宿泊業が 10.6%となっている。これは手向地区が観光地でもある羽黒山に位置し、また宿坊街が飲食・宿泊業を営んでいることを示している。ちなみに日帰りを含めた羽黒山への観光客数は、1996 年が 123 万人、2006 年が 68 万人と、44.7%と大幅な減少傾向を示している。
(4) 2011 年現在はいくつかの宿坊が休止状態にあるということであるが、現在のところ確認はとれていない。
(5) 2009 年 8 月 6 日聞き取り。K 氏は 1972 年生まれ。
(6) 2009 年 8 月 4 日聞き取り。H 氏は聞き取り当時 48 歳。
(7) 2009 年 8 月 6 日聞き取り。
(8) 2009 年 8 月 4 日聞き取り。
(9) T 氏は 1946 年生まれ。
(10) 2010 年 9 月 7 日聞き取り。
(11) 2009 年 9 月実施。
(12) 2010 年 9 月 11 日聞き取り。
(13) 2010 年 9 月 7 日聞き取り。

参考文献

板井正斉　2011『ささえあいの神道文化』弘文堂。

稲場圭信・櫻井義秀編　2009『社会貢献する宗教』世界思想社。

稲場圭信　2011『利他主義と宗教』弘文堂。

岩鼻道明　2003『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院。

竹元秀樹　2008「自発的地域活動の生起・成長要因と現代的意義―宮崎県都城市「おかげ祭り」を事例に―」『地域社会学年報』第 20 集、地域社会学会。

戸川安章編　1975『出羽三山と東北修験の研究』名著出版。

広井良典　2005『ケアのゆくえ　科学のゆくえ』岩波書店。

広井良典　2008『コミュニティを問い直す』筑摩書房。
藤本頼生　2009「子育て支援と境内地の活用―神道的福祉の実現の場としての神社の可能性」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』1 号、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター。
宮川公男・大守隆編　2004『ソーシャル・キャピタル―現代経済社会のガバナンスの基礎』東洋経済新報社。
吉住登志喜　2004「宿坊町のいま昔」『別冊　東北学』8 号、東北芸術工科大学東北文化研究センター。
Putnam, Robert D., Robert Leonardi, and RaŠaella Nanetti 1993 *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy.* Princeton, N.J.: Princeton University Press.